

國は雍正六年(千七百二)に立てし所の界標を案じ、沙濱達巴哈界標の末端より、西方齋桑湖ザイサンに至り、次で西南に延ひ、天山の特穆爾圖淖爾ナムールの南に順ひ。次で浩罕邊界に及ぶ間の界標未定の地は、山嶺に順じ、河流に沿ふて新に之を決定せんと約したり。當時兩國大臣相會同し、以て全部を實查せしや否やを知らずと雖も、清廷は實際に齋桑湖以西を失ひたるは此時に在りとす。

當時清國は轉た言ふべからざるの不幸を重ねたり。英佛の同盟軍は北京を陥れ、長髮賊は西南を擾亂し、而して東干亦西北に起る。蓋し東干トシガンは即ち漢回にして當時甘肅の諸部より、新疆の東北部に最も多く住居し、其の壯丁久しく清國の兵役に服し、新疆の戍兵は東干實に其の半に居れり。

由來東干は、清人と和せず、其の和せざる大本は、宗教を異にするより生じて、遂には相敵視するに至れり。會、同治元年(千八百六)兩者の反目其極に達する時、甘州に於ける兩民間の一小事變は、忽ち東干躍起の一大導火線と爲りて、火の手は爆然八方に擧り、平素の恨み報ゆべしと、鬱結したる憤怨一時に迸發して、滿漢人の殺戮、城邑の破壊等、到る處亂暴狼藉にして、悲痛慘憺を極めたり。乃ち甘肅新疆は全く修